

現代日本キリスト教文学全集 2 「日本への土着」

定価 1200 円

著者 遠藤周作・有吉佐和子・阪田寛夫

発行者 武藤富男

発行所 株式会社 教文館

一〇四・東京都中央区銀座四一五一

振替・東京一一三五七・電(五六二)八四四六

印刷所 伸光印刷株式会社

昭和四八年 二月二〇日 初版発行

乱丁・落丁はお取り替えます

© 1973

配給元 日キ版 東京都新宿区新小川町3-1 振替・東京60976
電話(260) 5664 (代)

0393-625020-6100 (日キ版)

日本への土着

現代日本キリスト教文学全集

2

教文館

目次

黄金の国……………	遠藤周作……………五
黄色い人……………	遠藤周作……………七
江口の里……………	有吉佐和子……………三六
音楽入門……………	阪田寛夫……………三二
解説……………	武田友寿……………二七

装
幀
熊
谷
博
人

黄金の国

三幕九場

遠藤周作

登場人物

井上筑後守

平田主膳

加納源之介

朝長作右衛門

雪

フェレイラ

嘉助

はつ

茂吉

久市

のろ作

とめ

役人一

役人二

役人三

役人四

百姓一

百姓二

百姓三

百姓四

百姓五

子供たちの声
悪魔の囁い声など

第一幕

第一場

島原の乱後、二年。

長崎、宗門奉行、井上筑後守の奉行所。

子供たちの歌が聞える。「提灯屋、バイバイバイ、石投げたもんな、手の腐る。提灯屋、バイバイバイ、石投げたもんの手の腐る」

井上 盆の宵か。子供たちの歌う盆歌には、なにか哀しい響きがあるな。もうこの長崎に下ってから四月になる。

平田（媚びるように）その四月の間、切支丹糾問の儀は見違えるほど捗り、長崎より大村、平戸に至るまで禁制の主旨行き渡りまして、あらかたの百姓、邪法を棄てましたのも、殿が来られてからでございます。この長崎奉

行所でも捕えました南蛮伴天連二名、日本人イルマン五名、同宿七名、お悦び申しあげます。

井上 だが、まだ潜伏しておる南蛮伴天連もいる。……早う、すべてが片付かぬものか。疑う。捕える。捕える。転ばせる。切支丹は心の強さに己れを賭け、我等はその体を責める。人間は体と心とのいずれが強いかを試す。いや、それよりも、余はもう人を疑うのに疲れた。お前、このような役目がふと嫌にならぬか。

平田 人を疑うのがわが役目と思うておりますからな。役人の私は他人をみれば疑って疑って疑いぬきます。それが相手のまことをあばく道すじでございますからな。

井上 まことをあばく道すじか。一方、切支丹たちは、まづ人を信ぜよと申しておる。それが人のまことをつかむ道だと。

平田 だが、殿、たとえばこの奉行所に、切支丹がひそみおるといたします。表は我々同様、お役目一途に勤め励み、かげではかくれおります伴天連や信徒百姓をひそかに助けるといたしますれば……。人間は表ではとても信じられませぬな。まことを嗅ぎつけるのは、私のような人間でございましょうな。

井上 なるほど。お前にかかつては、同僚、身内まで疑心

の種か。余も蒲生家の臣であった時、一度は切支丹の教えを信じたことがあったぞ。とすると、この余も、お

前、疑うことがあるか。まあよい。(きびしい口調で) 今、お前、この奉行所に……切支丹がおると申したな。

平田 とは申しませぬ。たとえば、と……こう申しあげたまででございます。

井上 たとえば、か。狡い奴だな、お前は。そのように奥歯にものはさまった言い方をするのは……その切支

丹、よほど、余にそば近く仕える者に見えるな。

平田 それは主膳の口からは申させませぬ。殿の御賢察にお委せいたします。

井上、考えこみながら、茶を飲んでいる。砂時計の音なる。子供の歌きこえる。

井上 (顔をあげて) しかと、証拠でもあるのか。

平田 たとえば……。

井上、首をふって平田を制す。加納源之介登場。

源之介 殿。大村家御家老、大村家忠様、殿にお目通り致

したき由、ただ今、お出ででございます。

井上 よしよし。書院の方にお通し申せ。

源之介 畏まりました。

井上 源之介、一寸待て。

源之介 お呼びでございますか。

井上 お前は幾つであつたかな。

源之介 二十歳にございます。

井上 嫁はまだとらぬのか。

源之介 まだお役目一途に考えておりますゆえ。

井上 いや。お役目を大事におもうならば、早うよき嫁をとることだ。平田、そうではないか。

平田 仰せの通り。

井上 もうよい、源之介。

源之介退場。

井上 主膳、話はあとで聴こう。されど、かりそめにもこの奉行所の役人に切支丹がおるとなれば、これは、ただ

にてはすまぬ。

平田 されば、私も殿のほか、もとより他言いたしておりませぬ。御指図にしたがい、江戸に伝わらぬうちに、ひそかに……。

井上、下手に退場。平田、あたりを見廻し合図をする。警吏、姿をあらわす。

平田 おい、あの女は来ておるか。とめとか申す女だ。

警吏 既に、あちらに参っております。

平田 よし。俺が合図をしたら、その女をここにつれて参れ。合図をしたらだぞ。

警吏退場。

源之介、さきほど井上筑後守が飲んだ茶道具を片付けに部屋に入ってくる。平田をみて挨拶する。

平田 二十歳か。

源之介 は？

平田 二十歳か。美しい歳だ。

源之介 さようでございますか。

平田 俺も二十歳という年齢があった。お前と同じようにまだ奉行所に入ったばかり、人を信ずることを知っていた。だがさきほど殿に申し上げたように、人間を疑い、糾問してこの十五年の歲月、役目の垢はいつか、さがとなり、習いは性となりこのような人間ができあがった。源之介、お前もやがて、俺と同じようになるぞ。

(笑う)

源之介 私は、そのようになりたくはありません。

平田 若いうちは誰でもそう考える。だが、そうはいかぬ。そうは、どうしてもいかぬ。(間を置いて) ところでお前、さきほど殿から嫁女をもらえとやさしいお言葉頂いたな。

源之介 有難いことと思っております。

平田 (皮肉に) 殿は……若い者にも……よう心を配られるわ。

源之介 それはもう、身にしてみて。

平田 ところで、お前、どういう嫁を所望じゃ。

源之介 は？

平田 どういう嫁を所望かと聞いておるのだ。ええ、恥ず

かしゅうて言えぬか。

源之介 まだ……考えたことはございませぬ。

平田 うそを言え。二十歳の年で、自分がどのような娘を嫁にするかと日夜、心に想い描かぬ男はおらぬわ。

源之介 私は、さような、男ではございませぬ。

平田 そうかな、それならば、眼をつぶってみろ。俺たちがこう話している時も……お前と生涯つれそう娘は、今、どこかに生きておるのだぞ。この国の……いや、ひよっとすると、この長崎で。

源之介 おからかい下さいますな。

平田 いや、からかつてはおらぬ。俺もな、二十歳の時、そのようなことばかり考えていたものだ。お前の心には見えぬか。お前の嫁になる娘が。俺には今、その娘が何をしておるか、わかつておる。

源之介 (ひきこまれて) 何を、しておりますか。

平田 ただいま厠にて用足し中である……いやいや許せ。この口がいかぬ。(手で口を叩く) 俺のような年齢になると美しいものをちと汚したくなる癖ができる。いやな男だ、この俺は。そう思わぬか。(笑う) ところで、お前、真実、どのような嫁がほしい。

源之介 私は母一人、子一人でございすゆえ、母に孝行してくれのようなやさしき嫁をもらいとうございす。

平田 当り障りのない返事をするわ、こいつ。その言い方がお前の処世術か、すると心さえやさしければ、顔の美醜は問わぬと言うのだな。

源之介 (小声で何か呟く)

平田 え、よく聞きとれぬぞ。

源之介 それは……見めもうるわしければ……なお、結構でございます。

平田 ほれ、見ろ、ならばそうと早く申せばよいのに。ところでお前、大村家の家老が何ゆえ、今日まいったか、知っておるか。

源之介 存じませぬ。平田さまは、御存知でございますか。

平田 知らないでどうする。この眼は奉行所のことなら何事でも見透せる眼だ。この鼻はどんな人間のかくしごとも嗅ぎわけける鼻だ。でなくては狡猾な切支丹どもを糾問することはできぬわ。お前はさきほどから殊勝ぶったことばかり申しておるが、心のなかで何を思っているか、それぐらい、俺には手にとるようにわかるのだ。

源之介 他人に知られて恥ずかしいかくしごとなぞ私には
ごさいませぬ。

平田 そうかな。(平田、源之介を嗅いで) 匂うぞ、匂う
ぞ。

源之介 御戯れがすぎます、平田さま。

平田 (自分に言いよかせるように) なあ、俺が今、嗅いでいるのは俺が喪った匂いだ。この俺だってな、昔、お前のように若かった時には憧れというものを遠い向うに置いて、それにどうにもならぬ思いを持ったことがあるぞ。長崎、丸山の街を真白にきよめた雪のなかを、傘もささず、ただ歩きまわった冬の朝。惚れた女の名を思案橋の上で幾度も呟いた秋の黄昏。その女の名はお前が今、心に思っている娘と同じ雪と言うたわ。どうした、この名を聞いた途端、お前の顔は、はれ、紅葉のように。(源之介逃げるように退場)

朝長 作右衛門、上手より現われる。

朝長 平田殿、お役目御苦勞に存ずる。

平田 (とぼけて) これは朝長さま、たった今、あの源之

介にたわいもない昔話をきかせておりました。昔、奉行所にはじめて勤めました頃の話で……昔話を若い者に聞かせるようになっては、やはり年でございますな。(笑つて) この主膳ももう若くはございませぬ。

朝長 なにを、平田殿はまだまだお若い。拙者こそ老けたと申すもの。お役目もそろそろ辛うござる。この所、平戸のオランダ人とエゲレス商人たちの争いで、彼の地に赴いておりました。双方ともそれぞれの言い分があることゆえ、一応、殿の御裁断を仰がねばと。

平田 なるほど、ポルトガル、エスパニヤ、あるいはエゲレス、オランダなど南蛮北狄の国々よりこの地の果てに、黄金の国を求め、幻の夢を抱き、波濤万里、我が国に船を送ってまいります。してみるとちやうど我が日本国は幾人もの女に懸想された男とよく似ておりますな。

考えようによつては日本とは男冥利につきた果報者でございます。エスパニヤと申す女に思いをかけられ、ポルトガルとよぶ女にも袖引かれ、それにオランダ、エゲレスにもそれぞれ、眼くばせなどをされ……。

朝長 これはこれは、平田殿らしいとえだ。だがその女たちの中から、どれか妻を選ぼうというのが日本だが……

…平田殿ならばどれを妻になされる。

この話の途中、井上筑後守、下手より姿をみせ、じっと朝長作右衛門を観察している。

平田（井上に気づくが知らん顔をして）はて、切支丹信徒ならば一夫一妻を固く守るゆえ、朝長さまの仰せの通り、ただ一人の妻を選ばねばなりませぬが、私はもとより切支丹ではござらぬ、どれも選ばうとは思ひませぬが。

朝長 はて？ どれも選ばぬとは？

平田 どれにも、情けをかけてやります。

朝長（笑いながら）いやいや、平田殿、いやしくも人の道を守る者ならば、幾人もの女に同時に情けをかけることはできませんまい。

平田（皮肉に）これはこれは。お固い。人の道？でございますか。御存知でもありませんが、九州の諸大名がその昔、ポルトガルやエスパニヤとの通商をば願ひながら、切支丹に踏み切らなかつたのは、昔、伴天連から、一人の正室以外女をもつことを許さぬと言われしためと

聞いております。その時のパーデレの言いようは、さぞかし今の朝長さまと、そっくりでありましたろう。

井上 平田、平田。朝長作右衛門はお前などとは違うて、妻に死に別れたのちも後ぞいをもらわず今日まで操をたてたまことの武士だ。作右衛門、平戸での役目、大儀であつたな。

朝長作右衛門、あわてて筑後守に向つて礼をする。

朝長 作右衛門、平戸よりただ今、戻つて参りました。

井上 しかし作右衛門、平田の申すも一理あるな。いや、余の存念では、我が日本国は平田の申す通り、四人の女に思ひをかけられた男ではあるが、ただ、その四人の女がごとく醜女でな。下世話に醜女の深情けという言葉があるが、氣にいらぬ醜女に深情けをかけられたからと言うて、その中から何も急いで一人を選ばずともよいであろうが。むかし余が蒲生家の家臣であつた時、蒲生殿は四人の側室がたがい妬みあい、角たておうて争うを見られ、どうなされたと思う。四人とも城より追いだ

された。黄金の国との幻をいだいてこの日本に参る南蛮のエスパニヤ、ポルトガルやオランダ、エゲレスはさながらこの四人の側室のごときものだ。たがいに妬みあい、たがいに讒をなす。日本国としてはこの醜女の深情けは、甚だもつて有難迷惑。そう余は考えておる。

朝長 されば、殿は蒲生殿のように四人の醜女を四人とも城より追い出されますか。

井上 いや、それも亦、思慮の足りぬと申すものだ。城より追いだされた女たちはその後な、蒲生家の内情を口そろえて織田殿に告げ知らせ申した。蒲生家滅亡の因は一つにはそこにある。ところで作右衛門、平戸よりの報告はどうだ。

朝長 ただ今の殿の仰せの通りにてございます。オランダ、エゲレスの商人等はそれぞれ競い、我等に相手国の讒をなしますゆえ、ほとほと、困惑いたして戻って参りました。

井上 困惑どころか、かえって悦ばしきことだ。馬市では馬は競りあわせたほうが値があがる。

朝長 なるほど、御意の通りでございます。そこまではこの朝長、考えが及びませんでした。

井上 ともかく、その話はゆっくりあとで聞こう。ところで、朝長、この平田がさきほど妙なことを申しおった。そのほうが今、余を困惑させておるのだ。

平田 殿、あれはたとえ話でございます。

井上 たとえ話だが、朝長、かりにこの奉行所の誰かが、この平田でもよい、源之介でもよい、心に切支丹の教えを未だに奉じておるものがおるのではないかなどと耳にすれば、たとえ、たとえ話でも。

朝長 そう、平田殿が申されましたか。

井上 たとえ話としてな。

朝長 平田殿のお役目熱心はみな存じております。そのたとえ話も、平田殿の熱心さのあまり出たものと存じますが、作右衛門……（笑って）まさか、この奉行所に切支丹の役人がおるなどと。

井上 余もそう思う。しかし、お前も知つての通り、この余も昔は一度切支丹の門徒であつたこともある。内田主馬もそうだ。石井彦二郎も若年の頃、切支丹の話を聞いた身だ。朝長、お前も大村純忠様御存命の折、たしか洗礼を受けたとか。そうふりかえってみれば、一度は脛に傷もつた身だ。（笑って）平田のたとえ話で聞けなくな

るな。

朝長 御案じなさいますな。殿は、たしか、昔は切支丹、しかし今はその切支丹を取り調べられる奉行さま。そして内田主馬にしろ、石井彦二郎も、その昔、切支丹でございましたゆえに、殿はわざわざ奉行役人として召しかかえられたものではございませぬか。

井上 お前の申す通りだ。内田にしろ石井にしろ、若年の折、ともかくも切支丹であつたゆえに切支丹の心の動きを一番よう知っている。切支丹がどこで強いとか、どこで弱いとか、どのように取り調べの者に嘘をつくとか、どう責めればよいとか。転んだ者は、相手を転ばす秘訣を知っておるものだ。それゆえ内田も石井も余の役にたつ。

朝長 御意にございます。

井上 朝長、お前も同じだ。お前も転び者ゆえ奉行所の役にたつ。切支丹の心の裏面を見ぬことができる。なあ、そうではないか。

朝長 そのように、殿に仰せられますと……拙者がまるで……平田殿に疑われました相手のような気がいたしますな。

井上 馬鹿を申せ。こう申しては何だが、そこもとなど

は、平田などとはちがい女のたとえ話にもすぐ顔色の変わる男だ。とても本心をつつみかくして、余たちの前で芝居のうてるほど狡猾な男ではないわ。なあ、平田。

平田 仰せの通りでございます。朝長さまがかりに切支丹だとするならば、この主膳、今後、切支丹の調べ方を変えねばなりませんまい。

井上 平田も役目熱心のあまり、時折、愚かしい考えに陥るのは慎むがよいぞ。ところで朝長、フェレイラと申す南蛮伴天連を知っておるか。

朝長 知らないで、どうしましょう。いまだにこの日本のどこかに潜伏しております、御公儀の眼をかすめ布教いたしております、ポルトガルのパードレでござりましょう。慶長十九年より日本国に参り、二十五年間、かのジェズイットと申す宗門の要職にたずさわっております。

井上 よく存じておるな。

平田 存じておられるのも道理でございます。朝長さまは大村家家臣の折、そのフェレイラにより洗礼を受けたお一人でございますから……朝長さま、気を悪くнаされますな。主膳、この奉行所の方々のことならば、何事も